原田牧場 Note Page 6

原 田　希

昔は、栄養があるからどんどん飲みなさいと言われていた牛乳ですが、健康食品というよりは、嗜好品として好きな方が適量取り入れれば良いという考え方に賛成です。北海道は日本の食料庫として農場の大型化、機械化が進み、コロナ渦の直前まで、増産する農場向けの助成金が目に見えて増えたと感じていました。需要と供給のバランスは国や乳業メーカーが見てくれているから、どんどん増産すればいい＝大きな借金をしても大丈夫。その感覚が普通なのがこわいなと思っていたところ、コロナ渦で需要が落ち込みました。ちょっと待てよ、とみんなが慎重になりだし、内心ほっとしています。昨今では、牛が反芻する際のげっぷから発生するメタンガスが、地球温暖化に大きく影響していると言われ、牛肉や牛乳を摂取しすぎないことがＳＤＧｓ につながるとのこと。みんなの地球を間借りして生活を営んでいる一酪農家としてできることを真剣に考える時代と感じます。生産量は暮らせる分でいいな。もし余剰ができたなら、地域の酪農を後継してくれる人の応援に使いたいな。森や川や生物を守る植樹活動のボランティア。近場は電気自動車で。牛のふん尿からエネルギーをつくり出すバイオマスプラントは、設備費がもう少し安くなれば考えてみたいです。

私たち夫婦の会話の98％は仕事の話です。今しばらくはふたりの牧場、いつかどちらかひとりになった時の牧場の話もしています。私の体質の事情で子どもを持たなかったからわが子を見るような気持ちで牛一頭一頭を見ています。搾乳牛は100頭、活発な牛の一群、何産もしているおばあちゃん牛や、体の小さい初産牛、気性がおとなしくていじめられがちな痩せた牛を集めた二群（ケア群）にわけ、平等にもりもり食べられる牛舎です。
牛社会には序列があります。初めて群に入ってきた牛は全員から角突きを挑まれます。
優劣順序を作ることで無益な争いを減らす習性で、負けっぱなしの牛はいつも残りものしか食べられません。早く並んだものがちで搾乳室へ入り、搾り終わった牛から餌場へ行けるのですが、最下層の牛が先頭に並んでいたとしても、自分の順列がわかっているから一番には入ってこず、結局最後まで立ちつくして待つのです。当然体格も大きくなれませんし、毛艶も悪い。牛が入れ替わっても永遠に弱い立場の牛が存在する、それをどう救いあげるかが我々の大事な任務といえます。

今日も最下層の牛をなるべく早い順番で搾ってやろうと思い、強いトップ牛をかきわけて呼び入れたけれど、居心地悪そうに下を向いて喧嘩を売られないようにしていました。牛社会のルールに人間が入ってきても困るんだよ、と言わんばかりでしたが、毎日続けて良い餌が食べられれば体格は大きくなり、順位はあがります。草食動物は、懐きはしませんが、アイコンタクトはできるようになります。今、恐いやつおれへんから、入っておいでや、っていう私の合図をちゃんと見ているのです。そしてついに自力で早い順番で搾りに来たときは、おっ！やったやん！と私も目だけで笑います。収益性でいえば、強い体格のいい牛を優先しておけばいいのでしょうが、産まれてきたからには、どの牛にも能力を最大限発揮してもらい最後まで健康に活躍してもらいたいのです。

同じにしてはいけないと思いつつも、人間社会も似たよう、縮図を見るようだなと感じますね。大いばりで喧嘩を売り続けていたトップ牛が、勝手に足を滑らせてびっこになった時に、全員から返り打ちにあっていたのには苦笑いしました。トップはトップで意地があるんでしょう。おばあちゃん牛でも、若い衆、お先にどうぞ、と余裕ある牛がいると思えば、年功序列よ！若い者は下がりなさい。と気高い牛もいます。昔の牛に比べ最近の牛はのんびり屋が多い気がしますし、性格のカラーも同期ごとに違います。観察すればするほど面白いです。

そんなこんなで15年、気になる牛を見続けていたら、自分のまわりの人に対しても同じような感覚になっていました。定年を越えて働いてくれているパートさんが10年前とは動きが変わってきたとき、新しく入った若いスタッフが判断を迷っているとき、道外からのお嫁さん仲間がなんか元気ないなあというときも、軽い冗談（だいたいは、関西人お得意の自虐）を交えて声をかけたり、さりげなくサポートができるようにしたい。就農したての時には、我が事でいっぱいで気づかなった感覚。牛から教えられました。

毎日がんばって牛乳を生産しているので、どんどん飲んでください、とキャンペーンみたいなことは言いません。現場を見ずに食品の背景をイメージするのは至難の技だと思いますが、どの牧場にも、どの牛にも、命の成長ドラマがあり、健やかな牛からおいしい牛乳ができています。乳製品を味わう時に、少し想像していただけると嬉しいです。隣の世界への想像がハッピーの礎。私もいつも心にとどめています。

筆者　　原田　希　ハラダ ノゾミ

1973年 大阪府吹田市生まれ
2006年 酪農家との結婚を機に北海道標茶町へ移住 自身も酪農家に
2017年 北海道農業士に認定
北海道指導農業士の夫とともに、新規就農者の支援や
女性の農業者向けの勉強会のお世話係を担当